

**<書評> アラン・ダンデス, 他/著 荒木博之/編訳  
『フォークロアの理論-歴史地理的方法を越えて-』**

著者	鈴木 寛之
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	9
ページ	206-208
発行年	1994-03-31
その他のタイトル	<Book Reviews>Alan Dundes(Ed.) “ Theories of Folklore-Over the Historical-geography method ”
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/14307">http://hdl.handle.net/2241/14307</a>

るが、これらのことは、特に個々の地域性の問題として体系的把握が試みられている。

しかし、本書中で「筆者の関心」、「当面の課題」として示されたことは、単に氏自身の研究姿勢の披瀝と言うよりも、本書の編集に際して同氏が意図した所を示すものであろう。ただし、編著者自身はその個々の論稿についての若干の「解説」を付しているに過ぎず、自らの調査した東北地方各地の死霊結婚について、その地域的特性の把握という観点から論及しているほかは、各論稿の内容にそのまま語らせるか、あるいは読者や今後の研究者にこの作業を託す形をとっている。同氏は、この「解説」の最後で、近年中国民俗学の研究体制が整ったことに触れ、中国における研究の進展に期待を示した上で、「こうした中国をはじめとする周辺各国の研究動向に留意しつつ、各地の死霊結婚の習俗を慎重に分析してゆかねばならない。そして、広く東アジアを視野にいたかたちで、これを把握することが肝要となってくるであろう。」(傍点評者)と述べている。このように、氏は東北地方における自らの研究で課題としたことが、その他の地域でも同様に進展を見ることによって、東アジア総体としての死霊結婚の研究につながることを期待しているのである。

本書は、「東アジアの死霊結婚」というタイトルはついているものの、東アジアにおける死霊結婚の比較研究を積極的に推進するという性格は薄いように思われる。編著者の意図は、むしろ比較研究の問題点や課題を浮き彫りにするところであり、そのために研究史を整理したものとして本書は意義を持つと言える。松崎氏はまた、本書の性格について、「全体的にまとまりは少ないものの、地域毎の特徴に照らして各論者が独自の視点からアプローチを試みており、我々は様々な分析方法を学びとることができるとともに、数多くの論稿を比較することにより、問題の所在が明確になる」と述べており、研究者の視点や分析方法の比較ということにも本書の意義を見出している。

以上のような本書の性格は、編著者の研究姿勢によるところも大きい。死霊結婚をめぐる本格

的な研究がまだ緒についたばかりであることも背景にあると言える。その意味では、本書は編著者自身が言うように、東アジア全体を視野に入れた今後の死霊結婚研究への「初めの一歩」なのかも知れない。

最後に、本書の巻末に竹田旦の作成したものに編著者が加筆した、中国・韓国・日本の死霊結婚に関する文献目録が載せられていることも付記しておく。これは、本書中の個々の論稿と併せて、今後の死霊結婚の研究に大いに役立つものと考え

(1993年12月 岩田書院刊A 5判576頁)

アラン・ダンデス、他／著  
荒木 博之／編訳

『フォークロアの理論  
— 歴史地理的方法を越えて —』

鈴木 寛※

本書の企画意図について、編者は冒頭の〈序論〉で次のように述べている。「この書はフォークロアとは何か、民間説話 (folktale) とは何かという本質的な問いかけに答えようとする意図をもった論文を中心に編集したものである」と。編集に当たっての視覚は、日本においても既にその業績がひろく知られている歴史地理的方法論、フィンランド学派の方法論に関しては紹介を控え、その後の反フィンランド学派の旗手としてのアラン・ダンデス、並びにフォン＝シドウ、ヘルマン・パウジンガーらの方法論の紹介が主要な目途となっている。内容を概観してみると、以下のとおり、序論ほか8篇の論考から本書は構成されている。

〈序論〉「フォークロアの理論 — 歴史地理的方法を越えて」(荒木博之)

1. アラン・ダンデス

「フォークロアとは何か」(荒木訳)

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

2. ウィリアム・トムズ  
「フォークロア」 (荒木訳)
3. フランシス・リー・アトリー  
「民衆文学 — 研究方法からの定義」  
(春田節子訳)
4. アーチャー・テイラー  
「フォークロアと文学研究者」  
(伊藤詔子訳)
5. ウィリアム・R・バスコム  
「民俗学と人類学」 (山下欣一訳)
6. フォン・シドウ  
「民話について」 (谷口幸男訳)
7. ヘルマン・パウジンガー  
「世間話の構造」 (竹原威滋訳)
8. アラン・ダンデス  
「昔話の構造的・研究におけるエティッ  
ク単位からイーミックス単位へ」  
(美濃部京子訳)

ある特定の説話を分析するにあたって、類話を数多く蒐集し、モチーフ間の異同を検討して話の「原型」を推察するのが歴史地理的方法であるとすれば、本書に収められた論考は、総じてその批判と克服を意図すべく集成されたものといえる。上記の1から5までは、アラン・ダンデス編『フォークロアの研究』(1964)に収録されたものであり、主として1940年代から60年代にかけての論考がまとめられている。中で、初出の最も古いウィリアム・トムズによる2は、1846年、それまで「民衆の古習」(Popular Antiquities)や、「民衆文学」(Popular Literature)などと称されてきた「民間伝承」総体を初めて「フォークロア」と命名した、記念碑的な文章である。

ダンデスの編著を主軸に据えた本書の〈序論〉で編者はまず、そのダンデスの論考「フォークとは誰なのか」を紹介する<sup>(1)</sup>。19世紀末、欧米で国家規模の民俗学研究機関が組織されていった時期には、フォークとは、文明社会のエリートと、未開社会の人びととの中間に位置する「読み書き

のできる社会における『文盲』であると理解されていた。これに対してダンデスは、フォークとは「どのような人びとの集団であれ、一つの共通した因子を分ち持っている人びとである」と定義した。集団の成員間に、自分たちが拠って立つ何らかの「伝統の共通の核」が認められれば、その人びとが即ちフォークであるとする「柔軟」な定義の仕方である。

この定義は、本書収載のダンデスの論考(上記1)においても既に主張されている。通例フォークロアとは「口頭伝承」そのもの、もしくはその中にあるものと認識されているが、ダンデスはそうした定義では十全ではない点を指摘し、具体的な「フォークロアの種々の形態」のリストを提示する。リストに掲げられた項目は、神話・伝説といった「口頭伝承」の範疇に入るものを主軸としつつも、刺繍のデザインや家の型など、物質文化に関わるものも散見されるが、その項目自体は、特に体系的にまとめられたものではない。フォークという言葉の定義の斬新さは認められるが、その立場での具体的な研究の展開については、ここではまだ言及されていない。

3, 4, 5の論考は、いずれも、それぞれの立場からフォークロアの定義づけを試みた先駆的業績である。とりわけ3では「フォークロア学者」と、商業的な立場からフォークロアを「大衆化する人たち」との確執など、近年注目されることの多い話題が既に1960年代に提示されている点に目を引かれる。

次に本書の主要な論考の一つである6を概観してみたい。フォン＝シドウは、地域社会における説話の主要な管理者をトラディターと名付けた。トラディターと、トラディターの周辺に位置する「受身的な語り手」との相互作用のなかで説話は伝播されてゆくとする考え方である。

また、フォン＝シドウは、ある特定の話型とその類話を、単にプロトタイプとそこから派生したサブタイプとしてとらえるのではなく、いずれも特別の文化的背景をもった民族的、地域的変形(オイコタイプ)としてとらえるべきだと説く。歴史

地理学派が、国境は説話の伝播の妨げにはならないと認識してきたのに対して、このオイコタイプ理論では、説話の分布状況に、政治的な境界線や民族の移動・分割に伴うトラディターの移住が強く関与している点が強調されている。

オイコタイプ論の提示した問い掛けは、日本の民俗学の文脈に馴染んだ言葉でいうと、説話を「伝承母胎」との関連のなかでとらえるということでもある。近年の日本の伝説・世間話研究にこうした視点が多見される点からも、フォン＝シドウの業績が、本書の刊行を機に再び注目されることであろう。

7のヘルマン・パウジンガー「世間話の構造」は、初出は1958年であるが、本書によって初めてその全容が紹介されたことになる。「世間話」という語は即、日常生活の枠組からはみ出た「奇事異聞」一般を指す言葉であるといった認識は、さすがに近年では薄まってきた感があるが、「日常」を世間話がどう扱うのかという点に関しては、いまだに明確な結論は提示されていない。本論考が問いかけるのも、まさにその「日常」の対象化という問題であり、論のまとめで、「一見混乱したように見える今日の日常的世界の中に、秩序をもたらし要因を捜し求め」るのが今後の民俗学の課題であるとする問題意識は、実に明快である。

本書の掉尾を飾るのは、再びダンデスによる8である。ダンデスは本稿で、トンプソンの提唱したモチーフ概念をエティック的なものと批判し、プロップの提唱した「機能(function)」概念を発展的に展開させた、説話の構成単位としての「モチーフ素」こそがイーミックな単位であると指摘している<sup>(2)</sup>。

本書を概観すると、収載論文の初出はいずれも1964年以前のものであるが、現在もお議論的となる「民俗」とは何か、「常民」とは何かという、学の根本に関わる問題について、極めて示唆的な言説が散見される。口承文芸研究の文脈で言えば、これらダンデスの議論が近年、日本の世間話研究に与えてきた影響といった点に関して、本書で言及される部分が少ないという憾みもあるが、本書

の公刊は、「民俗学」自体を問いなおすという時宜に叶ったものであり、口承文芸の分野のみならず、今こそひろく読まれるべき書物であると言える。

## 註

- (1) ダンデスのこの論考は、はやく飯島吉晴によってその全訳が紹介されている(飯島訳「常民(folk)とは何か」I・II、『人類文化』第5・6合併号/第7号、人類文化研究会、1985/1988年、参照)。
- (2) 本稿もまた、先に飯島吉晴による訳出が紹介されている(飯島訳「昔話の構造論的研究における分析単位——エティックからエミックへ——」『世間話研究』2、世間話研究会、1990年、参照)。

(法政大学出版局 1994年1月刊)